

第384号 (令和2年12月1日(火)発行)

発行所

京都女子大学 宗教部

京都市東山区今熊野北日吉町35  
電話 075 (531) 7074

# 華利陀芬

上品の懺悔とは、身の毛孔のうちに血を流し、眼のうちに血出すをば上品の懺悔と名づく。(中略) 流涙・流血等にあらはずといへども、ただよく真心徹するものはすなはち上と同じ。(善導『往生礼讃』)



法学部准教授 西 義人

## やばい、尊い

やばいエッセイ

むかしむかし、「やばい」という言葉には肯定的な意味がありませんでした。若い人には実感がなにかもありませんが、『日本国語大辞典』「やばい」の項には今でも「危険や不都合が予測されるさまである。危ない」という意味だけが出ています。伝統的にはこの意味に限られるのです。それが現在では「これうちの犬の写真」「え、やばい」という会話が聞こえてきても、牙をむいている猛犬ではなく可愛い犬の写真を見せているのだからと普通に予想できるほど、肯定的な使われ方もおなじみになりました。

あるいは背く。それでも仏の慈悲の光は、生きとし生ける命みんなに等しく降り注いでくださっているのです。聞かせてもらおうと、私なんか、感覚的にビューンと涙がでるほど嬉しくなってしまうのです。ばかみたいですが、「私ばかだな」というのが浄土教の教えなのかなとも思っている。こんな解説の仕方をしていたら偉いお坊さんに怒られそうです。(中略) 私たちはいくら修行を積んだところで、煩惱を捨てることはできない、煩惱だらけの私たちをそのまま、舟に乗って浄土に連れて行ってくださると説かれているのです。やばくないですか、優しすぎて。逆にこれを疑わずに乗るほうが難しい。

宗の教えのいちばん大切なところを、こんなに易しく温かくリズムカルに表現することができるとか。そして、「やばくないですか」の絶妙さ。うわあ、こんな言い回しされちゃったらもう、やられたなあ、乏しい語彙で喰らばかりでした。でも考えてみればあちらはたくさん歌を作った。こられたプロ中のプロ。感性や言葉を磨く努力もしていない者にはうらやむ資格がありません。素直にありがたく味わわせていただきますよ。そんなことを思っているわけでは

味があると思われています。ひとつは、文字通り、信じていることが難しいということ。これは、「私が」納得して信じてるか、「私が」しっかりと確信するということ、一般的な意味で「私が信じている」ということで、煩惱を持ってたまま、煩惱を完全にならした仏になれる「教えです」と聞いても、私の納得や確信を求めるのであれば、「そんなわけあるか。矛盾している。証拠もない」というように、到底信じていることにはきません。そうではなく、「理屈はいいからこの阿弥陀仏にまかせなさい。大丈夫」という願いを聞いて、「あつはい」とまかせることが、浄土真宗の信なので。「信じて」というより「信じさせられる」。信じる努力など何も要らない教えであるから、私の側から信じようとする、かえって難信になるのです。

改めて二階堂さんの文章を読んでみると、「やばくないですか、優しすぎて。逆にこれを疑わずに乗るほうが難しい」と、実はしっかりと難信という文脈になっています。もしかしたら「難信」と同様の二重性を持つ言葉で「やばい」を使用されたのかもしれない。やばい、このことを学んだ当初、「難」に肯定的な意味があるということが感覚的にしっくりきませんでした。結論ありきの強引な解釈なのではないかとも思いました。ですが、阿彌陀仏の救いが「やばい」と表現されているのを見て、もしかしてこういうニュアンスだったのかなと腑に落ちたんですね。

「過去を振り返って、『あの時があつて良かった。』そう思えて、人に話す日がきつとくる。」ほんの30年生きてきただけですが、私はここで、常に自分を支えてくれるこの言葉に出会いました。私は一度転職しています。前職は大学卒業後すぐに入社し、右も左も分からず戸惑いの多い毎日でした。学生時代にアルバイトをほとんどしたこととなく、働くということに対するイメージを持っていないままで、今考えると、学生気分がなかなか抜けなかったのだと思います。一方、規則に身だたしなみについての記載があるくらい、その会社では常に高い社会人意識を持つことが求められていました。当時は、このギャップを前に何をどうしたら良いか全く分から

「一代諸教の信よりも弘願の信楽なほかたし難中之難」ときたまひ無過此難とのべたまふ(註釈版聖典、五六八頁)

「一代諸教」というのは、釈尊が一生の間に説かれたすべての教え(浄土真宗を除く)のこと。そして「弘願の信楽」というのは、煩惱だらけの私をそのままにしてくれるという阿彌陀仏の願(第十八願)を信じて、つまり浄土真宗の信心のことです。

この「難しい」を、思いきって「やばい」に置き換えて読んでみましょう。親鸞聖人がこの和讃にこめた感覚を、時代を超えて共有することができ、かもしませんよ。

浄土真宗では親鸞聖人のご恩に報いるため、聖人の命日を中心に報恩講が営まれています。本学園でも毎年十一月初旬の土曜日に学園講堂で勤修されています。

親鸞聖人は六十三歳のころ、関東から妻の恵信公や子どもたちと共に京都に戻られています。帰洛後は、主著『教行信証』をはじめ、多くの聖教を執筆されました。そして聖人は弘長二年(一二六三)(旧暦では十一月二十八日、新暦では一月十六日)に、三条高小路にあつた聖人の弟尋有の坊舎(善法坊)で、午時(昼の十二時頃)に九十歳で往生されました。

報恩講という名称が使用されるようになったのは、第三代覚如上人の時代からです。永仁二年(一二九四)、覚如上人は二十五歳の時に、親鸞聖人の三十三回忌法要に当たり、『報恩講私記(式)』という書物を著されています。この書物は聖人の遺徳を讃えたものです。『報恩講私記(式)』が著されて以降、聖人の御正法要(命日に営まれる法要)を報恩講と呼ぶようになりました。

浄土真宗の各派では聖人の忌日までの七日間、報恩講が営まれます。本願寺派では、新暦によって一月九日から十六日までの七日間勤められます。報恩講は地域によって、本願寺よりも早く勤めることから「お取り越し」とも呼ばれています。私の育った地域にも、本願寺直属の寺院(別院)があつて、毎年「お取り越し」が勤められています。門前には沢山のお店が出て、買い物やゲームを楽しむ人達で賑わっていました。(普)

### 大学若手職員からのメッセージ

「過去を振り返って、『あの時があつて良かった。』そう思えて、人に話す日がきつとくる。」ほんの30年生きてきただけですが、私はここで、常に自分を支えてくれるこの言葉に出会いました。私は一度転職しています。前職は大学卒業後すぐに入社し、右も左も分からず戸惑いの多い毎日でした。学生時代にアルバイトをほとんどしたこととなく、働くということに対するイメージを持っていないままで、今考えると、学生気分がなかなか抜けなかったのだと思います。一方、規則に身だたしなみについての記載があるくらい、その会社では常に高い社会人意識を持つことが求められていました。当時は、このギャップを前に何をどうしたら良いか全く分から

「やばい」と「難しい」と「やばくないですか」がこれほど響いたのは、そのフレンドリーな語感もさることながら、「やばい」という言葉の二重性が、浄土真宗の教えの特徴に実によくフィットしていたことが大きな要因だったのではないかと、思うのです。

浄土真宗の教えは「難信」、つまり信じていることが難しい教えと表現されます。そして、その「難信」には大きく二つの意味があると思われています。ひとつは、文字通り、信じていることが難しいということ。これは、「私が」納得して信じてるか、「私が」しっかりと確信するということ、一般的な意味で「私が信じている」ということで、煩惱を持ってたまま、煩惱を完全にならした仏になれる「教えです」と聞いても、私の納得や確信を求めるのであれば、「そんなわけあるか。矛盾している。証拠もない」というように、到底信じていることにはきません。そうではなく、「理屈はいいからこの阿弥陀仏にまかせなさい。大丈夫」という願いを聞いて、「あつはい」とまかせることが、浄土真宗の信なので。「信じて」というより「信じさせられる」。信じる努力など何も要らない教えであるから、私の側から信じようとする、かえって難信になるのです。

### ⑥伝えたいこと

自分が生きていくうえで、自分が求めるものが分からなかったから、今の挫折感を感じてしまっている。また、あの時、拙い話を聞いてもらえて良かった。自分が生きていくうえで大事なものを教えてもらったから、それに、私は今こうしてあなたに自分の経験を話すことができています。本当にあの言葉通りになりました。私なりに言い換えれば、「今まで起きた事は全部、それで良かったと思える日がきつとくるから、大丈夫。しんどい経験は、将来、絶対に誰かの力になれる。」私からもっと大事な言葉、少しでも記憶に残していただくと幸いです。

「教務部 学部事務課 佐藤 里弥」

「やばい」と「難しい」と「やばくないですか」がこれほど響いたのは、そのフレンドリーな語感もさることながら、「やばい」という言葉の二重性が、浄土真宗の教えの特徴に実によくフィットしていたことが大きな要因だったのではないかと、思うのです。

